

程度副詞の分類の試み

——その程度・量・基準により——

中山 恵利子

1 はじめに

副詞は「品詞論のはきだめ」と言われて久しい。この「はきだめ」観は、富士谷成章の「挿頭抄」が「脚結抄」のような意義、職能による分類をしておらず、五十音順に説明している点にすでに窺われる、との見方もあるほどである。研究史上においては、「はきだめ一掃論（副詞消滅論）」（鈴木1959）が出たこともある。

程度副詞とは、山田文法以来の通説となった副詞三分類「情態・程度・陳述」のうちの一つである。諸学説を概観するに、三副詞のとらえ方は二大別される。一つは、陳述副詞を辞を修飾するものとして他の二副詞と区別する考え方で、もう一つは、情態副詞を他品詞に帰属せしめ、残る二副詞を副詞とする考え方である¹⁾。興味深いことに、程度副詞は或いは情態副詞、或いは陳述副詞と組まれ、常に副詞とされている。このことは程度副詞が最も副詞らしい性質を持っている、ということなのだろうか、それは、つまり最もはきだめの要素を持っている、ということなのだろうか。しかし、常に副詞とされてきた程度副詞は、詳細な論稿が少なく、整理のなされていない副詞のなかにあって、整理する必要もないかの如く扱われてきた感がある。本稿では、数少ない先行研究をふまえて程度副詞の下位分類を試みたい。

対象語として、程度副詞を体系的に扱っている次の五本の論稿のうち、三本以上がそれと認める32語を取り上げる（表1）。

論稿：森重（1959） 奥津（1980） 川端（1983）

工藤（1983） 森山（1985）

32語：はなはだ・すこぶる・きわめて・だいぶ・相当・少し・かなり・ちょっと（5本）

非常に・大変・ごく・ずいぶん・わりあい・なかなか・多少・とても・最も・一番・やや（4本）

比較的・もっと・少々・ずっと・けっこう・より・至って・たいそう・よほど・あまりに・いっそう・一段と・ひときわ（3本）

また、分析は、採集した用例と作例（筆者の内省）または、アンケート調査の結果により行った。用例採集のための作品は、現代口語性を考慮し、21冊を選んだ（表2）。

2 程度副詞の分類

2-1 程度副詞の「程度」

程度副詞の性質として真先に挙げられるのは、その程度を以て修飾することである。

ある家を前にして、A氏が

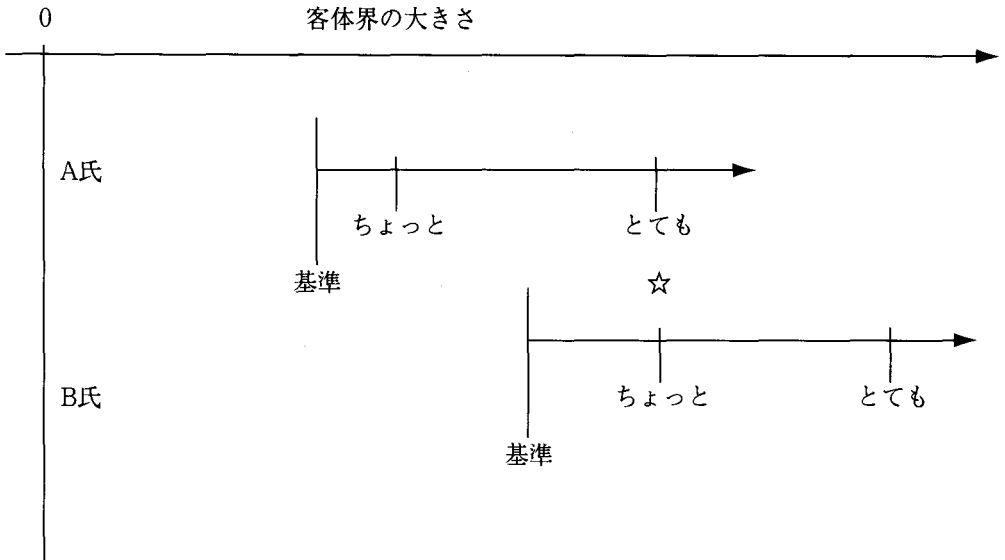
この家はとても大きいよ。

と言い、B氏が

この家はちょっと大きいね。

と言った。これは、程度副詞の有する「程度」が、現実の事象に固有の客観的・実質的概念ではないことを示唆する。また、言語主体によって程度の判断が異なることもわかる。A氏が「とても」と言い、B氏が「ちょっと」というのは、それぞれが設定する基準が異なるからである。程度副詞の表す「程度」とは、言語主体が設定

図1 程度の基準1



A、B両氏が設定する基準の差により、A氏が「とても大きい」と思う大きさを、B氏が「ちょっと大きい」とする場合もある。

した基準と現実の事象との比較差をしめすものである、ということが出来る (図1)。

また、先のA氏が、別の家を見て、

あの家はちょっと大きい。

と言った場合、聞き手は、「あの家」より「この家」のほうが大きい、と理解する。これは、程度副詞の示す程度が、程度性の序列 (尺度) に対応していることを示す。

程度副詞を序列化したものに森重(1959)、奥津(1980)、川端(1983)、工藤(1983)がある (表3)。諸説を概観すると、大まかな序列は存在するが、「とても」と「非常に」はどちらが程度性が大きいのか、などといったレベルでの分析はなされていない。よって、五段階の序列はだいたい一致するが、一語一語を追うと、例えば「ずいぶん・たいそう」が「とても・非常に」と同レベルになったり、「相当・かなり」と同レベルになったりしている。奥津が序列化にあたり、「(その順位を) 私の主観でつけて並べてみた」と言うのとおり、主観的な分類にすぎない。このことは、例えば、同じ基準を持つ者同士が同じ家を見た場合、同じ程度副詞を使うとは限

らないということである。設定する基準が言語主体により異なるだけでなく、程度性の序列も言語主体により異なるので、話し手と聞き手の間で誤解が生じやすい語だと言える。

程度副詞の序列がいかに主観的か、次の一例で理解される。

かなりどころか、相当不利である。(サ) 諸説では「相当」と「かなり」を同一グループに分類しているが、この言語主体は、「かなり」より「相当」のほうがずっと程度性が大きいと考えているようである。これについては、アンケートを行ってみた²⁾。アンケート結果はこの言語主体の程度性の序列観を多少裏付けるものとなったが、中には、「相当」より「かなり」のほうが程度性が大きいとする回答もあり、ここで得られた結果はその傾向を示すというにとどめる。アンケート結果を含めた程度性の大まかな序列は、最後に示す。

以上、述べてきたところをまとめると、次のようになる。

程度副詞の「程度」は

(1)客観的具体的概念ではなく

- (2)言語主体が設定した前提と現実との比較差であり、
 (3)主観的な程度性の序列に対応するものである。

2-2 程度副詞の「量」

程度副詞は程度をもって、程度性を含む他語を修飾することを、その本分とするが、なかには、

きのうはかなり飲んだよ。

のように、測定可能な対象の量を要求できる量動詞と共起して、量を表すものがある。これを森山(1985)に倣って、「量的程度副詞」と呼ぶことにする。これに対し、量動詞と共起しないものを「純粹程度副詞」(森山)と呼ぶ。量的程度副詞については、工藤(1983)と森山がその論稿のなかで扱っている。

以下、いくつかの共起テストにより、32語を量的程度副詞と純粹程度副詞に分ける。工藤・森山両氏のテスト結果も併せて示す(表4)。

その結果、32語の程度副詞は次のように分類される。

純粹程度副詞	はなはだ・すこぶる・きわめて・非常に・たいへん・ごく・とても・いたって・ひときわ
量的程度副詞	だいぶ・相当・少し・かなり・ちょっと・ずいぶん・わりあい・なかなか・多少・最も・一番・やや・比較的・もっと・少々・ずっと・けっこう・より・たいそう・(よほど・あまりに・いっそう・一段と)

表4において、(○)と記した「よほど・あまりに・いっそう・一段と」は、量動詞の言いきりの形とは共起せず、文に何らかの型を要求するものである。

- ?よほど食べた。→よほど食べたらしく、
 その晩は、お腹が痛いと言っていた。
 →私の方がよほど食べたわよ。

- ?あまりに食べた。→あまりに食べすぎて、
 気分が悪くなった。
 ?いっそう食べた。→昔から好きでたくさん食べていたが、その話を聞いてから、
 いっそう食べるようになった。
 ?一段と食べた。→(それを食べると)
 ダイエットに効くとわかって一段と食べるようになった。

また、これらは、「たくさん」等を補うと、意味がよりはっきりする。このような量性の弱い語(量そのものを意味として持つ、と言い切れない語)は、この4語のほかにも、

だいぶ、ずいぶん、わりあい、なかなか、最も、一番、比較的、もっと、けっこう、よりと、10語もある。

森山は、このうちの「最も・一番・ずっと・より」を純粹程度副詞としている。この点については後述する。(2-3-2)

2-3 程度副詞の「基準」

2-3-1 絶対程度副詞

程度副詞がある種の名詞と共起することは、先行研究において言い古されてきた事実である。「右・前・上・昔」等、程度副詞が共起する名詞(相対名詞:奥津1974)は常に基準を持つものである。

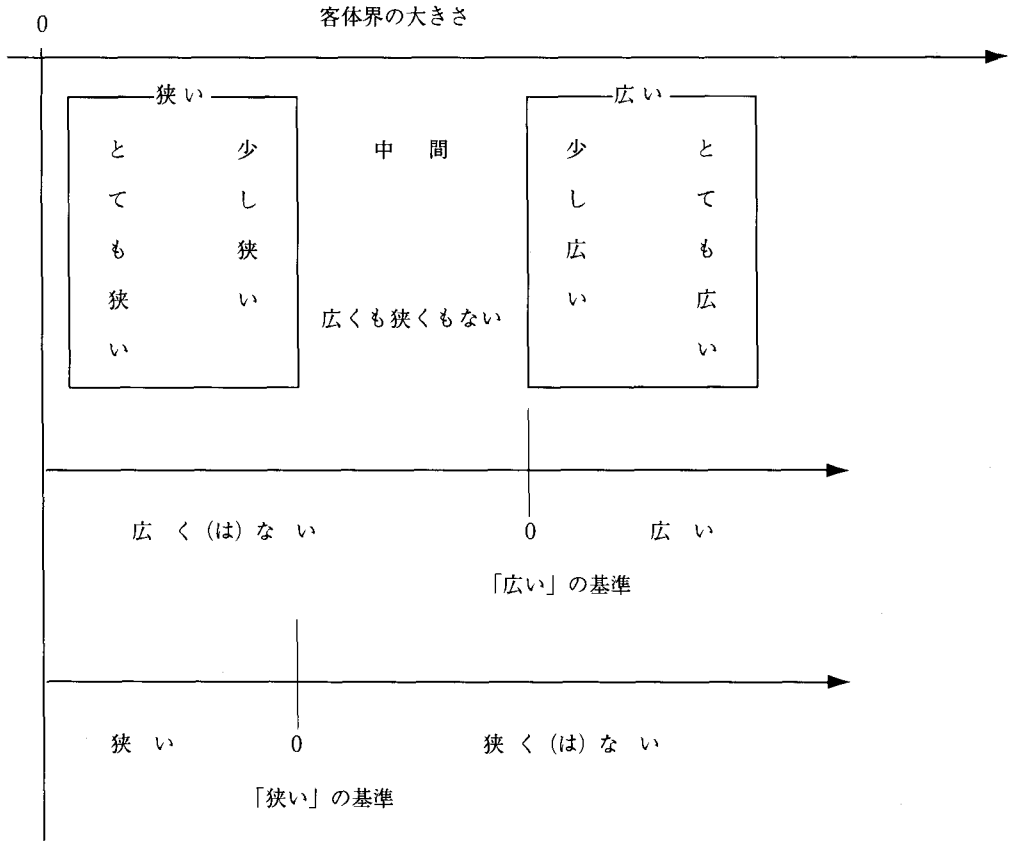
テレビのちょっと右
 (今より)少し前

基準は基本的に明示されるが、明白な場合は省略されることもある。

程度副詞がこの相対名詞と共起するということは、基準との差(比較差)が、「どの程度であるか」を示すことである。全ての程度副詞が基準との差を程度として表すのにも関わらず、相対名詞と共起しないものもある(表5)。

- 銀行は、あの交差点よりずっと先だ。
 *銀行は、あの交差点よりとても先だ。

図2 程度の基準2



相対名詞と共起しないものは、以下の6副詞である。

はなはだ、すこぶる、非常に、大変、なかなか、とても

これらの程度副詞が、相対名詞と共起しないのはなぜであろう。相対名詞の基準と、これらの程度副詞の設定する基準とが違うからではないだろうか。上記の例を見ると、相対名詞の基準というのは任意の基準である。「右」は「テレビの右」になったり、「あなたの右」になったりする。相対名詞と共起しない程度副詞は、任意の基準を取らないものと考えられる。それでは、例えば、

私の弟はおでこがとても広い。

という場合の「とても」は何を基準としているのだろうか。程度は、程度性の序列に対応しているのであるから、高い程度から低い程度へ移

行し、ついには程度0となるところがある。その程度0点は、程度によって修飾されうる程度性を持たない点である。この場合「広い」は常に程度性を有する。「広い」の状態において、程度性がない点は、言語主体が「広い」と感じはじめる「広さ」と「広くない」と感じはじめる「広さ」の境目ということになる。この境目に「とても」は、程度0の基準を持つのである(図2)。それに対して、相対名詞の基準は、「広い」のように絶対程度0のところ、ではなく、任意のものを仮に程度0にするという変動的な、一過性の基準である。このことから、相対名詞と共起しない「とても」は、絶対程度0を基準とした尺度上でのみ、程度を表し、常に程度0からの「とても」分の程度を持ち、程度0以外の基準は取らない、と考えられる。また、程度0の基準は「とても」の示す程度量に内包

され、明示されることはない。が、相対名詞の基準は程度0の基準ではなく、だからこそ基本的に明示されるものである。

相対名詞と共起を拒む、これらの語を「絶対程度副詞」と名付ける。2-2において、量動詞との共起を調べたが、絶対程度副詞は、常に程度0からの程度のみを示すのであるから、量動詞とは共起を拒むはずである。6語のうち5語は純粹程度副詞であるが、「なかなか」のみ、量を表すかは疑問があるが、量動詞と共起する。「なかなか」は性質の異なるものとして、絶対程度副詞から外しておく。

2-3-2 関係的程度副詞

一方、相対名詞と共起する程度副詞は次の通りである。

だいぶ、相当、少し、かなり、ちょっと、ごく、ずいぶん、わりあい、多少、最も、一番、やや、比較的、もっと、少々、ずっと、けっこう、より、いたって、たいそう、よほど、あまりに、いっそう、一段と、ひときわ、きわめて

相対名詞と共起するということは、基準を明示してもかまわないということである。基準の明示は文に一定の型式を与える。つまり、

私は彼よりずっと後に生まれた。

に代表される比較構文である。この比較構文は相対名詞に限らず、形容詞や動詞文にも現れる。下線を付けた語が比較の型式をとる場合は三者以上の比較構文となる。

あの中でひときわ美しい人が、花子さんです。

昔といっても、あまりに昔のことなので、思い出せないんです。

このうち、常に比較をあらわすものは、

もっと、ずっと、いっそう、一段と、より、最も、一番、ひときわ

である。これらは、絶対程度副詞とは異なり、程度0の基準を内包した、一定の程度量をもつ

ものではなく、内外に設定された任意の程度を持つ基準との比較関係において、その比較差を表すものである。これらの程度副詞を「関係的程度副詞」とする。

(1)彼女はとても美しい。(絶対程度副詞)

(2)彼女はひときわ美しい。

(3)今日の彼女は一段と美しい。

(1)において、彼女の美しさは、程度0から「とても」分だけの程度を持つが、(2)における彼女の美しさは、他者との比較において他者より「ひときわ」程度が高い、ということであり、程度0からの「ひときわ」分の程度があるわけではない。(3)も、今までの彼女との比較において、今日の彼女は「一段と」美しさの程度が高いのであり、これも基準は程度0ではない。

2-2の量動詞との共起において、森山と判定が異なった「最も・一番・ずっと・より」はここに属する。この関係的程度副詞は、被修飾語に量動詞や量形容詞が来た場合も比較関係における基準との差を示しているのであり、量0を基準とした秤で量れる量を表すのではない。

Aさんはこの間よりかなり飲んだ。

Aさんは皆の中で一番飲んだ。

量的程度副詞「かなり」は、飲んだ量の差が「かなり」であることを示すが、「一番」は飲んだ量の差を示すのではなく、量の多少に関わらず、基準とする任意のグループの中での比較関係が「一番」であることを示すのである。これは、「最も・ずっと・より」や、ここに属する副詞全てに共通する性質である。よって、これらの語を森山が量的程度副詞としなかったとおり、量的程度副詞からは外す。逆に、森山は「もっと」を量的程度副詞としているが、それは次のような説明で否定されるだろう。

Aさんは(Bさんより)もっと飲んだよ。

において、AさんがBさんより量を多く飲んだことはわかるが、どのくらい多く飲んだかには言及しない。1杯でも10杯でも「もっと」である。比較関係(つまり、比較差として量や程度が存在すること)を示すが、「もっと」分の大きさの量や程度があるわけではない。

しかし、この関係的程度副詞のなかにも、比較差がどのくらいか、という大きさを持つものがある。例えば、昨日の気温は30度で、本日が32度のとき、

?きょうはきのうよりずっと暑い。

とはいえない。これは、2度の差は僅差であり、「ずっと」の示す差とそぐわないからである。これは「ひときわ」も同じである。また、「一段と」は、比較差が大きい上に、基準とするものの程度も大きくなければならない。

先生はいちだんと大きな声で言った。(と)の用例では、基準は、それ以前の先生の声であるが、それ以前の先生の声も大きい。よって、砂漠地帯などで夜中は氷点下で、昼は50度近い灼熱地獄になる場合、

?今は寒いけど、昼は一段と暑くなるよ。

とは言えないのである。これは「いっそう」も同様である。

また、比較関係のみを示す「もっと」と「より」は、これらの、比較の大小にまで言及する語を修飾することがある。

ずっと大きい。

→もっとずっと大きい。

いっそうお得。

→よりいっそうお得。

上の文に比べ、下の文は、比較関係がよりはっきりと表れている。

他の程度副詞を修飾する性質は「もっと」と「より」のみに見られる。「より」は、本来比較の基準を示す格助詞「より」を欧文の直訳語として用いたもので、比較関係のみを意義として示し、比較差の大小は示さない点、「もっと」と同様である。この2語が、比較関係を表すことは、基準をほとんど明示しない点からもうかがえる。基準を明示すると、下記の例のように、冗長になる。(強調したい場合には、用いることもある。)

より深く知ることになる。(墓)

今より、より深く知ることになる。

もっと女らしくなろう。(性)

今より、もっと女らしくなろう。

関係的程度副詞のなかにも、その比較関係のみを示す語と、比較関係の結果、比較差の大小を示すものがある。

比較関係(比較差の存在)を示すもの:

より、もっと/一番、もっとも

比較差の大小を示すもの:

ずっと、いっそう、一段と、ひときわ

2-3-3 極限的程度副詞

相対名詞と共に起する副詞のうち、関係的程度副詞を除いたものは、比較を明示したり、しなかったりする。

だいぶ、相当、少し、かなり、ちょっと、ごく、ずいぶん、わりあい、多少、少々、やや、比較的、けっこう、いたって、たいそう、よほど、あまりに、きわめて、

このうち、下線を付けたものは、三者以上の比較文と共に起するが、共起は自由である。

ごく、いたって、あまりに、きわめて

これらは、次の例に見られるように、基準(範囲限定)との比較によって程度を示すのではなく、基準は、その語がすでに持っている程度を強調するにすぎない。

左翼のなかでもきわめて左に偏ったグループだ。

彼はなみいる秀才のなかでもいたってよくできる。

上の例文は範囲を限定しなくても表す程度は変わらない。

きわめて左に偏ったグループだ。

彼はいたってよくできる。

これらの語が持つ程度は極限に近い程度であり、基準(範囲限定)をとると、その程度性が際立ち、具体化される。換言すれば、基準として示されるものは、その語の極限的程度を強調できる、高い程度を含んだものでなければならない。任意の基準を取るのではなく副詞のほうに基準を選択限定する点、「一番・最も」とは異なる。

*彼はできない生徒のなかでは、いたってよくできる。

彼はできない生徒のなかでは、一番よくできる。

比較基準との差を程度として表しているのではない点、量動詞と共起しない点（但し、「あまりに」は一定の条件の下で量動詞と共起する。）など、この語群は、比較構文を取る他の語とは一線を画する。これらの語が、比較構文を取る場合の基準は、上述の通りであるが、比較構文を取らない場合の基準は、被修飾語が示す一般的状态である。これらの語が示す程度は、比較構文の有無に関わらず、その極限状態である。

それはあまりにひどい。

「ひどい」ひどさの一般的状态（普通に考えられるひどさ）が基準であり、基準は「ひどい」に含まれるので、明示の必要がない。この4語を「極限的程度副詞」と名付ける（注3）。

2-3-4 量的程度副詞

相対名詞と共起するものから、「関係的・極限的程度副詞」を除いた、

だいぶ、相当、少し、かなり、ちょっと、ずいぶん、わりあい、多少、やや、比較的、少々、けっこう、たいそう、よほど

は、量動詞と共起する「量的程度副詞」である。「極限的程度副詞」同様、比較構文との共起は自由である。

量動詞と共起し、比較構文との共起が自由で、量を示すものに、「たくさん、500g」等の数量詞がある。

肉を500g食べた。

この500gは0gからの測定値であり、量0の基準を持つ。ところが、量形容詞と共起すると次のようになる。

肉が500g多い。

これは「1kgより500g多い」のかもしれない、「魚より500g多い」のかもしれない。いわば、秤の目盛りから切り取られた「500g分の量（重さ）」を示す。基準は必ず必要であるが、任意の基準であって、量0gではない。

量的程度副詞は、この「500g」と同じ性質を持つ。

肉をかなり食べた。

は、量0の基準を持つ「かなり」の量である。

平均よりかなり重い。（高い・大きい）

は、分量だけ切り取られた「かなり」分の量である。

しかし、この「かなり」は数量詞が量だけを示すのとは異なり、被修飾語が量性的のものであれば量を示し、次の例のように程度性的のものであれば程度を示す。

彼女はかなりきれいだ。

これは

彼女はとてもきれいだ。

と同様、程度0の基準を内包する程度を示すが、

彼女は私よりかなりきれいだ。

は、程度0からの「かなり」ではなくて、分量だけ切り取られた「かなり」分の程度なのである。

比較構文を取る量的程度副詞において、量と程度は連続する概念であることが分かる。

彼女は私よりかなり若い。

この文における比較差は、「若さ」という程度を示すのか、「〇歳」という量を示すのか区別はつかなくなる。

以上、量的程度副詞は、比較構文との共起が自由だが、比較構文を取る場合と、取らない場合とでは、示す程度や量が異なる。

●量0を基準とする量「かなり」

量動詞とのみ共起する・比較構文を取らない

●「かなり」分の大きさ（量・程度）

比較構文を取る

●程度0を基準とする程度「かなり」

量動詞とは共起しない・比較構文を取らない
また、2-2で述べたように、量の概念には、強弱がある。ここには「少し」のように、量性の強いものから「よほど」のように量性の弱いものまで含まれている。

量の概念の強いもの：少し、ちょっと、少々、相当、かなり、多少、たいそう、やや

量の概念の弱いもの：だいぶ、ずいぶん、比

較的, わりあい, けっ
こう, よほど

同じ。

3 まとめ

以上, 程度副詞がもつ程度の基準に注目し, それにより下位分類を試みた結果, 32語の程度副詞は次の4つに分類できる。

- 絶対程度副詞 はなはだ, すこぶる, 非常に, 大変, とても, (なかなか)
- 関係的程度副詞 もっと, ずっと, いっそう, 一段と, より, 最も, 一番, (ひときわ)
- 極限的程度副詞 ごく, いたって, きわめて, (あまりに)
- 量的程度副詞 少し, ちょっと, 少々, 相当, かなり, 多少, たいそう, やや, だいぶ, ずいぶん, 比較的, わりあい, けっこう, よほど

しかし, 中には, 「なかなか」や「あまりに」「ひときわ」のように, 同グループの他の語と性質を異にするものもあり, 「程度, 量, 基準」だけでは分類の限界がある。この点については, 一つの試みとして, 続稿でモダリティとの関係からの分類を行った。

上記の四分類については, 表6にまとめて示す。また, 程度性の「大まかな」序列については表7にまとめてみた。

注

- 1) 陳述副詞を辞を修飾するものとして, 他の2副詞と区別する考え方に, 山田(1908, 1936), 時枝(1950)があり, 情態副詞を用言または体言に帰属させ, 残る2副詞を副詞とする考え方に松下(1977—但し, 松下は程度・陳述という用語を用いていない。)川端(1964, 1983) 渡辺(1971)がある。これらに対して, 橋本(1948)は副詞の下位分類, それじたいに消極的な態度を示している。
- 2) アンケートは, 「かなり, そうとう, だいぶ, ずいぶん, たいそう」と, 「けっこう, わりあい, ひかなくてき, なかなか」との二つを作成した。形式は

百分満点のテストをしました。平均点が50点のとき, あなたが「かなりいい点だ」と思うのは, 何点ですか。同様に, 「かなり」以外の次の語についてもお答えください。

- かなりいい点だ。
- そうとういい点だ。
- ずいぶんいい点だ。
- だいぶいい点だ。
- たいそういい点だ。

各文の右に, 点数を書き込んでもらった。__点～__点という答え方の場合は, 下限点を採用した。対象は, 10代～80代の88人。内訳は, 10代12人, 20代20人, 30代22人, 40代18人, 50代6人, 60代7人, 70代2人, 80代1人である。

平均値を低い順に並べたのが, 次の表である。

わりあい	比較的	だいぶ	なかなか	けっこう	ずいぶん	かなり
64.8	66.2	72.4	77.5	81.1	81.9	84.3
そうとう	たいそう	「かなり」より「そうとう」のほうが, 程度が高いといえる結果になったが, 88人中28人は, 「かなり」のほうが程度が高い, としている。また, 6人は, 同程度としている。				
85.2	85.3					

- 3) 「関係的程度副詞」とした「ひときわ」も量動詞と共起しない, 相対名詞との共起に揺れがある等, 構文論的特徴からは, 「極限的程度副詞」に近い。が, 常に任意の他者との比較が感じられるので, 「関係的程度副詞」とした。

参考文献 (著者名・五十音順)

- 石神照雄 「比較表現から程度性副詞へ」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院, 1981年
- 石神照雄 「副詞の捉え方」『表現研究』第37号, 1982年
- 石神照雄 「副詞の原理」『副用語の研究』明治書院, 1983年
- 奥津敬一郎 「ホド—程度の形式副詞」『日本語教育』41号, 1980年
- 川端善明 「時の副詞(上)」『國語國文』第33巻 第11号, 1964年
- 川端善明 「副詞の条件」『副用語の研究』明治書院, 1983年
- 工藤 浩 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院, 1983年
- 鈴木一彦 「副詞の整理」『国語と国文学』12号, 1959

年	森重 敏	店の復刊) 勉誠社, 1977年
時枝誠記 『日本文法口語篇』 岩波全書, 1950年	森重 敏 『日本文法通論』 風間書房, 1959年	
橋本進吉 『国語法研究』 (橋本進吉博士著作集第二冊) 岩波書店, 1948年	森山卓郎 「程度副詞と動詞句」 『京都教育大学国文学会誌』 20号, 1985年	
松下大三郎 「山田氏の日本文法論を評す」 『國學院雑誌』 第14巻第10号, 1908年	山田孝雄 『日本文法論』 宝文館, 1908年	
松下大三郎 『改撰標準日本文法』 (28中文館書店の復刊) 勉誠社, 1974年	山田孝雄 『日本文法学概論』 宝文館, 1936年	
松下大三郎 『増補校訂標準日本口語法』 (30中文館書店の復刊) 勉誠社, 1974年	渡辺 実 「品詞論の諸問題—副用語・付属語—」 『日本文法講座1 総論』 明治書院, 1957年	
	渡辺 実 『国語構文論』 塙書房, 1971年	

表1 対象語

	森重	奥津	川端	工藤	森山		森重	奥津	川端	工藤	森山
はなはだ	○	○	○	○	○	わりに			○	○	
すこぶる	○	○	○	○	○	たいして	○		○		
きわめて	○	○	○	○	○	はるかに	○			○	
だいぶ	○	○	○	○	○	心もち	○			○	
相当	○	○	○	○	○	いくらか	○		○		
少し	○	○	○	○	○	ばかに	○	○			
かなり	○	○	○	○	○	とびきり	○		○		
ちょっと	○	○	○	○	○	な お	○		○		
非常に	○	○		○	○	さらに	○		○		
大変	○	○		○	○	ものすごく	○		○		
ごく	○	○		○	○	いささか	○				○
ずいぶん	○	○		○	○	著しく		○			○
わりあい	○	○		○	○		とびきり	すてきに	よけいに	よけいに	やたら
なかなか	○		○	○	○		またなう	すごく	まだ		ある程度
多少	○		○	○	○		ことさら	まあまあ	なおさら		
とても	○	○	○	○	○		とほく	ちっとも	減 法		
最も	○		○	○	○		一倍	全然	いくぶん		
一番	○		○	○	○		極度に	べらぼうに	も少し		
やや	○	○	○	○	○		なるほど	うんと	まずまず		
比較的				○	○		まづは		存 外		
もっと	○			○	○		あまた		さほど		
少々	○			○	○		ここだ		あまり		
ずっと	○			○	○		そこら				
けっこう	○			○	○		よ に				
より			○	○	○		たえて				
いたって	○	○		○	○		いと				
たいそう	○	○		○	○		いたく				
よほど	○		○	○	○		ひどく				
あまりに	○	○			○		大いに				
いっそう	○		○	○			それは				
一段と	○		○	○			いかにも				
ひときわ	○		○	○			猛 に				
							ち と				

表2 用例採集文献リスト

書名五十音順

	書名	出版年	著者名	出版社
愛	愛してよろしいですか	1982	田辺聖子	集英社文庫
伽	伽椰子のために	75	李恢成	新潮文庫
秋	暮らしの知恵 365日・秋の篇	90	西川勢津子	PHP文庫
く	くたばれ敬語	86	豊田有恒	角川文庫
現	現代文学の無視できない10人	89	つかこうへい	集英社文庫
こ	こんな女と暮らしてみたい	83	高橋三千綱	角川文庫
サ	サラリーマン反道徳精神のすすめ	84	青木雨彦	講談社文庫
墓	サンダカンの墓	77	山崎朋子	文春文庫
シ	シングルライフ	88	海老坂武	中公文庫
性	性愛論	94	上野千鶴子	河出書房
谷	谷川俊太郎の33の質問	86	谷川俊太郎	ちくま書房
男	男性自身困った人たち	83	山口瞳	新潮文庫
ど	どっこいショ	74	遠藤周作	講談社文庫
七	七つの恋の物語	84	渡辺淳一	新潮文庫
話	話せばわかるか	84	糸井重里	角川文庫
腐	腐蝕の構造	74	森村誠一	角川文庫
と	窓ぎわのトットちゃん	84	黒柳徹子	講談社文庫
三	三毛猫ホームズの推理	85	赤川次郎	角川文庫
娘	娘と私のアホ旅行	82	佐藤愛子	集英社文庫
も	もうひとつの満州	86	澤地久枝	文春文庫
ル	ルンルンを買っておうちに帰ろう	85	林真理子	角川文庫

表3 程度副詞の序列化

	1	2	3	4	5
奥津	少し ちょっと やや	比較的 わりあい	かなり 相当 だいぶ	あまりに・いたって きわめて・すこぶる ごく・はなはだ ずいぶん・たいそう とても・非常に	最も 一番
森重	低度	相当度	高度	極度	度外的極度
	少し 少々	なかなか・かなり よほど・すこぶる やや・わりあい 相当・けっこう	はなはだ・すこぶる よほど・とても・ たいへん・たいそう 非常に・ずいぶん	きわめて・いたって ごく	あまりに
川端	低度	相当度	比較的高度		最高度
	やや・多少 少し	よほど・だいぶ	いっそう・ずっと・もっと・一段と・ ひとときわ		最も・一番 いたって
工藤	やや・少し 多少・ ちょっと	なかなか・相当	はなはだ・すこぶる	とても・きわめて すこぶる	
	より	だいぶ・よほど	いっそう・一段と・ひとときわ		最も・一番
藤	少し・少々 多少・やや ちょっと	わりあい なかなか 比較的・けっこう	だいぶ・ずいぶん 相当・たいそう かなり・よほど	非常に・たいへん はなはだ・すこぶる ごく・きわめて いたって・とても	
	より		いっそう・もっと・ずっと・一段と・ ひとときわ		最も・一番

*程度副詞は、本稿で扱う語に限った。また、表記は統一した。

表4 量動詞との共起

表5 相対名詞との共起

	工藤	森山	食べる	ある	たくさん食べる	歩く	待つ		右	上	昔
はなはだ		×	×	×	○	×	×	はなはだ	×	×	×
すこぶる		×	×	×	○	×	×	すこぶる	×	×	×
きわめて		×	×	×	○	×	×	きわめて	△	△	△
だいぶ	○	○	○	○	○	○	○	だいぶ	○	○	○
そうとう		○	○	○	○	○	○	そうとう	○	○	○
すこし	○	○	○	○	×	○	○	すこし	○	○	○
かなり	○	○	○	○	○	○	○	かなり	○	○	○
ちょっと	○	○	○	○	×	○	○	ちょっと	○	○	○
非常に		×	×	×	○	×	×	非常に	×	×	×
たいへん		×	×	×	○	×	×	たいへん	×	×	×
ごく		×	×	×	○	×	×	ごく	△	△	△
ずいぶん	○	○	○	○	○	○	○	ずいぶん	○	○	○
わりあい		○	○	○	○	○	○	わりあい	○	○	○
なかなか		○	○	○	○	○	○	なかなか	×	×	×
多少	○	○	○	○	×	○	○	多少	○	○	○
とても		○	×	×	○	×	×	とても	×	×	×
最も		×	○	○	○	○	○	最も	○	○	○
一番		×	○	○	○	○	○	一番	○	○	○
やや		○	○	○	×	○	○	やや	○	○	○
比較的		○	○	○	○	○	○	比較的	○	○	○
もっと	○	○	○	○	○	○	○	もっと	○	○	○
少々		○	○	○	×	○	○	少々	○	○	○
ずっと		×	○	○	○	○	○	ずっと	○	○	○
けっこう		○	○	○	○	○	○	けっこう	○	○	○
より		×	○	○	○	○	○	より	○	○	○
いたって			×	×	○	×	×	いたって	△	△	△
たいそう			○	○	○	○	○	たいそう	○	○	○
よほど			(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	よほど	○	○	○
あまりに		×	(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	あまりに	○	○	○
いっそう			(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	いっそう	○	○	○
一段と			(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	一段と	○	○	○
ひときわ			×	×	△	×	×	ひときわ	○	○	△

共起可○ 共起不可× 共起に揺れ△ 文の型を要求する(○)

表6 程度副詞4分類

	純粋程度副詞			関係的 程度副詞	量的程度副詞		
	絶対程度副詞	極限の程度副詞			程度	比較差	量
概念	程度	極限的程度		比較差	程度	比較差	量
基準	程度0	一般的程度	高い程度	任意の程度量	程度0	任意の程度量	量0
共起	○程度性	○程度性	○程度性	○程度性	○程度性	○程度性	×程度性
状況	×量動詞	×量動詞	×量動詞	○量動詞	×量動詞	○量動詞	○量動詞
	×相対名詞	△相対名詞	△相対名詞	○相対名詞	×相対名詞	○相対名詞	×相対名詞
	×比較構文	×比較構文	○比較構文	○比較構文	×比較構文	○比較構文	×比較構文
副詞	はなはだ すこぶる 非常に 大変 とても	ごく いたって きわめて		もっと より 一番 最も 一段と いっそう ずっと	(量性の強いもの) 少し ちょっと 多少 少々		
	なかなか △程度性 △量動詞 ×相対名詞 ×比較構文	あまりに △程度性 (過度) ○量動詞 △相対名詞 ○比較構文		ひときわ ○程度性 ×量動詞 △相対名詞 ○比較構文	(量性の弱いもの) だいぶ ずいぶん けっこう よほど ひかてき わりあい		

表7 程度性の序列化

	無程度性 ←	→ 程度性	小 ⇔ 大			
(関係)		(量的) やや、少々 ちょっと 多少、少し ↓	わりあい 比較的 だいぶ なかなか よほど ↓	ずいぶん けっこう たいそう かなり そうとう	(絶対) とても たいへん 非常に はなはだ すこぶる	(極限) ごく きわめて あまりに いたって
	より、もっと	いっそう、一段と、ひときわ、ずっと			最も、一番	

(1995年10月19日受理)